

ヨエル書とラオデキア的なセブンスデー・アドベ ンチスト教会-第四十

Jeff Pippenger

2026-02-03

四十という数

ペテロは象徴的に、第三時にカイサリア・ピリピにあり、そこからカイサリア・マリテ
ィマと第九時へと向かっていた。マタイとマルコによれば、六日後、ペテロ、ヤコブ、ヨ
ハネは変容の山にいた。ルカは八日だと言い、パニウムとその山との間だとする。カイサ
リア・ピリピにおける陰府の門から、十字架の死に至るまでの途上に、途中、変容の山
での停留がある。パニウムから日曜法に至る三段階。初めにカイサリア、中間に変容の山
、終わりにカイサリア。初めに陰府、終わりに死、その中間に神の栄光。陰府の門で象徴
されるアルファの反逆と、神の子の死で象徴されるオメガの反逆。

フィリポ・カイサリアは土台である。なぜなら、そこでキリストは、ご自身の教会をその
上に建てようとした「岩」を指し示されたからである。変容の山は第二の段階であり、
そこで神殿が完成し、頂石が据えられる。その後、十字架における裁きという第三の段
階が続いた。

そして彼は彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言う。ここに立っている者の中
には、神の国が力をもって到来するのを見るまでは、決して死を味わわない者がいる
。」六日後、イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴い、彼らだけを連れて高い山に
登られ、彼らの前で変容された。その衣は輝き、雪のようにきわめて白くなり、地上
のいかなる洗濯人もそれほど白くすることはできないほどであった。そして、エリヤ
がモーセとともに彼らの前に現れ、イエスと語り合っていた。

するとペテロがイエスに答えて言った、「師よ、ここにいることは私たちにとって良
いことです。それゆえ、仮庵を三つ設けましょう。一つはあなたのために、一つはモー
セのために、一つはエリヤのために。」

彼は何と云うべきか分からなかった。彼らが非常に恐れていたからである。すると、彼
らを覆う雲が現れ、雲の中から声がした、「これはわたしの愛する子である。彼に聞
け」。そして、たちまち、彼らがあたりを見回すと、自分たちと共におられるイエス
のほかには、もはやだれも見えなかった。彼らが山を下りるとき、彼は、人の子が死
者の中からよみがえるまでは、見たことをだれにも話してはならないと彼らに命じた
。彼らはその言葉を心に留め、死者の中からの復活とは何を意味するのかについて、
互いに問い合った。マルコによる福音書 9:1-10。

山上において、ペテロは、モーセ、キリスト、エリヤのために仮庵を設けることを提案
する。

モーセは死を経たが、ミカエルが下って来て、彼の遺体が朽ち果てる前に、彼にいの
ちを与えた。サタンはその遺体を自分のものだとして主張して、これを留め置こうとし
たが、ミカエルはモーセを復活させ、彼を天へと携え上げた。サタンは激しく神に向か

って罵り、自分から獲物を奪い取ることをお許しになるのは不義であると糾弾した。しかし、神のしもべが彼の誘惑によって倒れたのであったにもかかわらず、キリストはその敵を叱責されなかった。彼は柔和に彼を御父に委ねて、「主があなたを戒められるように」と言われた。

イエスは弟子たちに、神の国が力をもって到来するのを見るまで、彼と共に立っている者の中には死を味わわない者がいると告げられた。変容において、この約束は成就した。そこではイエスの御顔が変わって太陽のように輝き、その衣は白くきらめいた。モーセは、イエスの再臨において死者の中からよみがえらされる者たちを代表して、そこに現れた。そして、死を見ることなく天に移されたエリヤは、キリストの再臨において不死に変えられ、死を見ることなく天に移される者たちを代表した。弟子たちは、驚きと恐れをもってイエスの卓越した威光と彼らをおおった雲を見、そして、「これはわたしの愛する子。これに聞け」と語る、恐るべき威厳をもって響く神の御声を聞いた。『初期の著作』164頁。

変容の山は、三つの幕屋を指し示している。すなわち、古代イスラエルの初期におけるモーセの幕屋、その受肉によって表されるキリストの幕屋、そしてエリヤによって表される、幕屋としての十四万四千人である。十四万四千人とは、キリストの再臨を見るまで、死を味わうことのない者たちである。変容の山は、十四万四千人に印が押される時点を示している。

十四万四千人の幕屋は、反型の仮庵の祭りにおいて立てられる。その山は、死を味わわない者たちを指し示し、また、三人の証人を立てて、彼らとその山において神の栄光を見るとき、それが反型の仮庵の祭りであることを示す。

彼らは、エリヤの幕屋として建て上げられる。その築き上げは、モーセとエリヤの双方が復活した2023年に始まった。まず、土台が据えられた。これは据えうる唯一の土台であり、その土台とは、隅の親石にして礎であるキリストである。次いで、頂石が据えられるが、それは、変貌の山において表されたとおりの、十四万四千人の封印を表している。その山において、ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、実際に死を味わわない者たちを表している。ペテロは後に、主が善いお方であることを味わい知り、霊的な家であった者こそが、祭司の王国であると記した。彼らは命を味わったゆえに、死を味わうことがない。

もしあなたがたが、主が恵み深い方であることを味わい知っているのなら、あなたがたが近づくその方は、生ける石であり、まことに人々には退けられたが、神に選ばれ、尊い方である。あなたがたもまた、生ける石として、霊的な家として築き上げられ、聖なる祭司職とされ、イエス・キリストによって神に受け入れられる霊的ないけにえをささげるためである。それゆえ、聖書にもこう記されている。「見よ、わたしはシオンに、選ばれ、尊い隅のかしら石を据える。彼に信頼する者は、決して辱められることがない。」第一ペテロ 2:3-6

「confounded」と訳されている語は「恥じる」を意味する。残りの者はペテロによって象徴されており、彼らの喜びは、後の雨のメッセージを拒んだ者たちと対照をなす。ペテロには御国の「鍵」が与えられたゆえに、十四万四千人に関する鍵の一つは、シオンに据えられた「隅のかしら石」である。その石は、義人の目には驚くべきものであり、エフライムの酔漢には、つまずきの石である。

家を建てる者たちが退けた石が、隅のかしら石となった。これは主のみわざであり、私たちの目には驚くべきことである。詩篇118篇22、23節

イエスは、ぶどう園の警えの結びにおいて、これらの聖句に言及された。

イエスは彼らに言われた。「あなたがたは聖書に、『建築者たちの捨てた石が、隅のかしら石となった。これは主のなされたことで、われらの目には不思議である』と書いてあるのを、読んだことがないのか。ゆえに、わたしはあなたがたに言う。神の国はあなたがたから取り上げられ、その実を結ぶ民に与えられる。この石につまずく者はだれでも打ち砕かれ、またこの石がだれかの上に落ちかかれば、その人を粉みじんにする。」祭司長たちとファリサイ人がこのたとえ話を聞いたとき、イエスが自分たちのことを語っておられるのだと悟った。彼らはイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆が彼を預言者だと見なしていたからである。マタイによる福音書 21:42-46

根本のメッセージを受け入れる者は、打ち砕かれる。なぜなら、岩はキリストであり、福音の業は人を塵に至るまでへりくだらせることにあるからである。

信仰による義認とは何か。これは、神が人間の栄光を塵に落とし、人が自分自身のためには自らの力では成し得ないことを人のために行われる御業である。人が自分が無に等しい者であることを悟るとき、彼らはキリストの義を着せられる備えが整う。彼らが終日神をほめたたえ、崇め始めるとき、仰ぎ見ることによって、同じ御姿へと変えられつつある。新生とは何か。それは、人に彼自身の真の本性、すなわち彼は自分自身においては無価値であることを明らかにすることである。Manuscript Releases, 第20巻, 117頁。

礎石を退ける者は誰であれ滅びる。これは、イエスがぶどう園のたとえを適用して語られたとおり、古代イスラエルにおいて成就したとおりである。ユダヤ人はキリストを拒んだ。彼らはモーセもまた拒んだ。もし彼らがモーセを信じていたなら、キリストもまた信じたであろうからである。彼らは神の律法を退け、人間の戒めを教義として教えた。キリスト、モーセ、そして律法はいずれも土台を表す象徴であり、据えうる土台はキリストただ一つである。しかし、土台としてのキリストは多くの象徴によって表されている。モーセと律法はいずれもこの事実の例証である。キリストは唯一の土台である。しかし、これは、キリストの預言の御言葉に見られる他の土台が、キリストのご性質のある側面を指し示す単なる象徴にすぎないことを意味している。

だれも、すでに据えられている土台、すなわちイエス・キリスト以外の土台を据えることはできません。第一コリント 3:11

イエスはみ言葉であり、そのみ言葉において示される規範は、御自身を表している。ゆえにホワイト夫人は、十戒はキリストの品性の写しであると記している。彼は初めであり終わりであり、このように表象されるとき、キリストが常に、物事の初めによってその終わりを例証されることが明らかにされる。み言葉として、彼はまた「真理」であり、真理は預言的な枠組みである。彼がご自身のみ言葉を封じ、またそれを解かれるとき、彼はユダの族の獅子であられる。彼はまた、冠石となる隅のかしら石でもあられる。隅のかしら石は、単に彼が基礎であること、すなわちヘブライ語の「真理」という語の第一文字で

あることの比喩である。冠石は神殿における完成の冠となる業であり、真理の枠組みと整合するとき、冠石は隅のかしら石の二十二倍の力を有する。主が慈しみ深いことを味わった者の目に驚くべきことは、隅のかしら石と冠石に整合した真理の枠組みの諸原則が、ペテロに与えられた預言的な鍵の一つをいかに指し示すかということである。

アルファという第一の文字は一であり、オメガという最後の文字は二十二である。ミラーの宝石は太陽のように輝くが、土埃を払う男がそれらの宝石を集め合わせたとき、それらは十倍に明るくなった。預言の系列の終わりは、その始まりと同一でありながら、いっそう力強い、という認識は「驚くべき」ものである。それはキリストの御品性の一要素であり、ペテロに与えられた鍵の一つであって、十四万四千人を縛るためのものである。

ペテロの「霊の家」は、ウィリアム・ミラーの夢の小箱であり、また、マラキ書の十分の一とささげ物の倉でもある。天の窓が開かれるとき、一方の者たちはその部屋から投げ出され、他方の者たちはその小箱に投げ入れられ、神の勝利の教会の白い亜麻布の制服を与えられる。

ユダの民は、厳粛にかつ公に、神の律法に従うことを誓約していた。しかし、エズラとネヘミヤの影響が一時的に退くと、多くの者が主から離れ去った。ネヘミヤはペルシアに帰還していた。彼がエルサレムを離れている間に、国を墮落させかねない悪が忍び込んだ。偶像礼拝者は都に足場を築いただけでなく、その存在によって神殿の神域そのものを汚した。通婚によって、大祭司エリアシブと、イスラエルの仇敵であるアンモン人トビヤとの間に親交が結ばれた。この聖ならざる同盟の結果、エリアシブは、従来は民の十分の一と供え物の納蔵庫として用いられていた神殿付属の一室の使用を、トビヤに許した。

アンモン人とモアブ人がイスラエルに対して示した残酷さと裏切りのゆえに、神はモーセを通して、彼らは永遠に神の民の会衆から締め出されるべきだと宣言しておられた。申命記23章3-6節参照。この御言葉に逆らって、大祭司は神の家の一室に保管されていた供え物を取り除き、この禁じられた民族の代表者のために場所を設けた。神とその真理の敵にこのような恩恵を与えることほど、神に対する大きな侮辱はありえなかった。

ペルシアから戻ったネヘミヤは、その大胆な冒瀆を知り、侵入者を追い出すために迅速な措置を講じた。「私は大いに心を痛めた」と彼は言う。「それで私は、トビヤの家財道具をその部屋からすべて投げ出した。次いで私は命じ、彼らは諸室を清めた。そして私は、神の宮の器と、穀物のささげ物と乳香を、再びそこへ運び入れた。」

神殿が汚されていたばかりでなく、献げ物も不当に流用されていた。これによって民の寛大な寄進心は挫かれる傾向を生じた。彼らは熱心と熱誠を失い、什一の献げ物を納めることを渋った。主の宮の宝物倉は十分に満たされず、神殿奉仕に携わる多くの歌うたいや他の者たちは、十分な扶持を受けられなかったため、神のわざを離れて他所に労を求めた。

ネヘミヤは、これらの弊害を是正するために着手した。彼は、主の宮の奉仕を離れていた者たちを集め、「彼らをおのおのその所に立たせた」。これによって民は確信を得、ユダの者はみな、「穀物と新しいぶどう酒と油の十分の一」を携えて来た。「忠

信と認められた」人々が「宝物倉の司」に任ぜられ、「その職務は兄弟たちに分配することであった」。預言者と王、669、670頁。

ネヘミヤが「トビヤを追い出した」とき、それは、キリストがまさに同じ神殿から両替人を追い出すことの予告であった。それは単に神殿そのものではなく、十分の一の献げ物が保管されていた神殿内のまさにその部屋であった。フィラデルフィアのエリアキムがラオデキアのシェブナに取って代わったとき、シェブナは遠い野に投げ捨てられた司庫であった。

万軍の主なる神はこう仰せられる。行って、この会計官、すなわち家令であるシェブナのもとに行き、言え、「あなたはここで何をしているのか。ここには誰がいるのか。あなたがここに自分のための墓を刻み出し、高き所に墓を刻む者のように、岩に自分のための住まいを彫り設けているとは、どういうことか。見よ、主はあなたを力ある捕囚のうちに運び去り、必ずあなたを包み覆う。主は必ずあなたを激しくねじり回し、球のようにして大いなる国へ投げ飛ばす。そこであなたは死に、そこであなたの栄華の車は、あなたの主君の家の恥となろう。わたしはあなたをその地位から追い払い、彼はあなたをその身分から引き降ろす。」

その日には、わたしはわがしもべ、ヒルキヤの子エリヤキムを召し出し、あなたの衣を彼に着せ、あなたの帯で彼を強め、あなたの政務を彼の手にゆだねる。彼はエルサレムの住民とユダの家に対して父となる。わたしはダビデの家の鍵を彼の肩に置く。彼が開けば、閉じる者はなく、彼が閉じれば、開く者はいない。

わたしは彼を、確かな所に打ち込まれた釘のように据える。彼は父の家にとって栄光の座となる。その父の家のすべての栄光、すなわちその胤とその裔、ならびに少量を容れるすべての器、杯の器から大瓶の器に至るまでが、ことごとく彼の上に懸けられる。その日には、万軍の主は仰せられる、確かな所に打ち付けられたその釘は取り外され、切り落とされ、落ち、それに懸けられていた重荷は断ち切られる。主がそう語られたからである。イザヤ書 22:15-22。

愚かなラオデキヤ人であるシェブナが追放されるその日に、エリヤキムに勝利の教会の統治が委ねられる。キリストが、尊い宝石を覆い隠していた瓦礫から十四万四千人の神殿を清められるとき、主は、シェブナにより表される者たちを「覆う」旨を示される。天の窓が開かれる以前には宝石は瓦礫に覆われており、瓦礫が投げ捨てられると、その瓦礫は恥で覆われる。ウィリアム・ミラーの夢は、十四万四千人の封印を指し示している。

宝石箱は、マラキの言う宝物倉であり、ペテロの言う霊の家であり、またペテロが建てたいと望んだエリヤの仮小屋である。塵払いの男は、宝石を箱に投じることによって、十四万四千人の封印を象徴している。マラキは、神の民がまことに神のもとに立ち帰ったことを証する試金石を示している。

そのとき、主を畏れる者たちは互いにしばしば語り合った。主は耳を傾け、これを聞かれ、主を畏れ、その御名を心に留める者たちのために、御前に記念の書が書き記された。万軍の主は言われる。「わたしがわたしの宝を集めるその日に、彼らはわたしのものとなる。人が自分に仕える子を憐れむように、わたしも彼らを憐れもう。」そのとき、あなたがたは立ち返り、義なる者と悪しき者、神に仕える者と仕えない者を見

分けるようになる。マラキ書 3章16-18節。

この箇所において「帰る」は鍵語である。神はご自身の民に御もとへ立ち帰るよう召しておられるが、同時に、その民に対し、十分の一とささげ物を返してご自身を試してみよと促しておられる。また、義なる者が「帰り」、そうすることによって賢い者と愚かな者を「識別」する時もある。主を畏れ、その御名を思う者こそ、十四万四千人の旗印となるべき者である。

主への畏れは第一の試金石である。ゆえに、十六節が「そのとき、主を畏れる者たちは」と述べる時、それは先行する預言的叙述を指し示している。

「『あなたがたの言葉は、わたしに逆らって激しかった』と主は仰せられる。それでも、あなたがたは言う、『私たちはあなたに逆らって、いったい何をそれほど語ったというのか。』あなたがたは言った、『神に仕えることはむなしい。私たちがそのおきてを守り、万軍の主の御前を嘆きつつ歩んだところで、何の益があろうか。』そして今や、私たちは高ぶる者を幸いだと呼ぶ。まことに、悪を行う者は栄え、神を試みる者さえも、かえって免れ出る。マラキ書 3章13-15節」

マラキは、「今や、われらは高慢な者を幸いなりと呼ぶ」と言う。エフライムの酔漢たちは「高ぶりの冠」と呼ばれ、彼らを苦しめた二人の預言者であるモーセとエリヤが死んだと思ったとき、彼らは喜んだ。彼らはあまりにも喜んで、互いに贈り物を送り合った。

そして彼らの死体は、霊的にはソドムまたエジプトと呼ばれる大いなる都の大通りに横たえられ、そこでは私たちの主も十字架につけられた。諸民族、諸部族、諸言語、諸国民の人々は三日半の間、彼らの死体を見、彼らの死体が墓に納められるのを許さない。地に住む者たちは彼らのことで喜び楽しみ、互いに贈り物を送り合う。これは、この二人の預言者が地に住む者たちを苦しめたからである。ヨハネの黙示録 11:8-10。

高ぶる者は、2020年7月18日から2023年に至るまで、幸いである。2020年7月18日、そのメッセージは「主」に対して「強硬」であった。2020年7月18日、私たちは、神とその御言葉に対して自分たちがいかに甚だしく語り逆らっていたかを認識していなかった。失望した私たちは、「神に仕えるのはむなしい。われらがその定めを守り、万軍の主の御前を嘆きつつ歩んだところで、何の益があるのか」という嘆きに表される待機の時に入った。これは、エレミヤが最初の失望を例証するときに示す嘆きと並行している。

わたしは、あざける者の会衆に座しもせず、喜びもしなかった。あなたの御手のゆえに、わたしは独り座した。あなたがわたしを憤りで満たされたからである。なぜ、わたしの痛みは絶え間なく、わたしの傷はいやしがたく、いやされることを拒むのか。あなたは全く、わたしにとって偽り者、また涸れゆく水のようにあられるのか。エレミヤ書 15:17, 18

2020年7月18日の予告をめぐって、我々の言葉は増長していた。そして、その時、我々は自分たちがいかにひどく反逆していたかを知らなかった。失望に際しては、遅延の時がすでに進行しており、一方は嘆き、他方は喜んだ。そのような文脈において、マラキは次のように述べる。

そのとき、主を恐れる者たちは互いにしばしば語り合った。主は耳を傾け、これを聞かれ、主を恐れる者、またその御名を思う者たちのために、主の御前に記念の書が書き記された。万軍の主は言われる。「わたしがわたしの宝を集めるその日に、彼らはわたしのものとなる。人が自分に仕える子を憐れむように、わたしは彼らを憐れむ。」

そのとき、あなたがたは立ち返って、義人と悪人とを、また、神に仕える者と神に仕えない者とを、見分けるであろう。マラキ書 3:16-18

2024年、『主の畏れ』として表象された基礎的な試金石が臨んだ。その試験において二つの階級が顕れ、その二つの階級を成す一団は、三日半のあいだ、定期的なZoom会議で互いにしばしば語り合っていた。主は彼らの論議に耳を傾けられた。主を畏れる階級は、その御名、すなわちパルモニ、ユダの部族の獅子、アルファとオメガ、真理、ことば、驚くべき言語学者、隅のかしら石と冠石、小羊、天の大祭司、神殿、岩を思い巡らした。その書に記された者たちは、栄光の御国の旗印を表す冠の上の宝石とされるであろう。彼がその宝石を整えられるとき、彼らは帰って来て、義人と悪人とを識別する。彼がその宝石を宝石箱に収めるとき、そのときこそ、誰が愚かで誰が賢いかが識別される。

マラキは次のように書き記している：

わたしに立ち帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたに立ち帰る。

しかし、あなたがたは言った、「どのようにして、私たちは立ち帰ろうか」。

十分の一の献げ物をことごとく倉に納めて、わが家に食物があるようにせよ。そして、今このことで、わたしがあなたがたのために天の窓を開き、祝福をあなたがたに送り出して、収める場所もないほどにするかどうか、わたしを試してみよ、と万軍の主は言われる。

宝庫は宝石箱であり、什一は賢い乙女たちである。

宝庫とは、新たな真理の枠組みに据えられた神の御言葉である。

その宝石箱に収められる宝石は、真夜中の叫びの使信に結びつく諸真理である。ネヘミヤの潔めにおいて示されているように、什一は神殿の特定の一室に保管されていた。その宝石箱と宝庫、すなわちペテロの言う「霊の家」は神の神殿を表し、宝石は、いと高き方の隠れ場において神性と結び合わされている人間という神殿を表している。

人間の使者は神の使信から切り離すことはできない。

宝石は神の使者であると同時に、彼らが宣べ伝える使信そのものでもある。

靈感はしばしば、使信と使者とを結合したものとして指し示す。

神は、古代イスラエルを召されたように、今日この時代にもご自分の教会を召し、この地上にあって光として立つようにしておられる。力強い真理の大なた、すなわち第一、第二、第三天使のメッセージによって、彼は彼らを他の諸教会と世から分離し、彼らをご自身との神聖な親しい交わりへと導かれた。彼は彼らを、ご自分の律法を託す器とし、またこの時代のための偉大な預言の真理を彼らに委ねられた。古代イスラエルに託された聖なる神託と同様に、これらは世界に伝えるべき神聖な委託である。黙示録14章の三天使は、神のメッセージの光を受け入れ、神の使者として地の隅々にまで警告を響かせに出て行く民を表している。キリストはご自分の従う者たちにこう

宣言される。「あなたがたは世の光である。」イエスを受け入れるすべての魂に、カルバリーの十字架はこう語る。「魂の価値を見よ。『全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えよ。』」この業を妨げることは、いかなるものであれ許されてはならない。これは現世における最重要の業であり、その及ぶところは永遠にまで広がるべきである。人々の贖いのためにご自身を犠牲としてささげ、そのうちに人の魂への愛を現されたイエスの愛が、すべての従う者を駆り立てるであろう。『証言』第5巻、455頁。

次稿において、これらの諸概念を総合し始める。

私の生涯の過去五十年間にわたり、私は経験を得る貴重な機会にあずかってきた。私は第一、第二、第三の天使のメッセージに関して経験を積んできた。これらの天使は、中天を飛び、世界に向けて警告のメッセージを宣べ伝える者として示されており、この地球の歴史の終わりの日々生きる人々に直接の関わりを有している。これらの天使の声を実際に聞く者はいない。というのも、彼らは、天の宇宙と調和して働く神の民を表す象徴だからである。神の御霊によって照らされ、真理によって聖化された男女が、三つのメッセージをその順序に従って宣べ伝えるのである。

私はこの厳粛な業において一つの役割を果たしてきた。私のキリスト者としての経験のほとんどすべてが、それと深く織り合わされている。現在生きている者の中に、私と類似の経験を有する者がいる。彼らは、この時のために明らかにされつつある真理を認識し、偉大なる導き手、主の軍の将と歩調を合わせてきた。

これらのメッセージを宣布するにあたり、預言のあらゆる細部はことごとく成就した。これらのメッセージの宣布に携わる特権にあずかった者たちは、彼らにとって至上の価値を有する経験を獲得した。そして今や、われわれがこの終末の危難のただ中にあり、四方から「ここにキリストがおられる」「ここに真理がある」と叫ぶ声が聞こえてくるとき、多くの者の重荷が、私たちを諸教会と世から導き出し、世にあって特立した民として立たせたところの、私たちの信仰の基礎を動揺させることに向けられている中で、ヨハネのように、私たちは証言するであろう：

「初めからあったもの、すなわち、私たちが聞き、私たちの目で見、つぶさに見つめ、また、私たちの手で触れた、いのちの言について；…私たちが見、また聞いたことを、あなたがたにも宣べ伝える。それは、あなたがたもまた、私たちと交わりを持つためである。」

私は、私が見、聞き、手ずから触れたいのちのことばに関する事柄を証しする。そして、この証しが父と子からのものであることを、私は知っている。私たちは、真理の提示に際して聖霊の力が伴ってきたこと、筆と口とによる警告がなされ、また数々のメッセージがその順序に従って与えられてきたことを、見、これを証しする。この働きを否定することは、聖霊を否定することにほかならず、惑わす霊に聞き従って信仰から離れ去った者たちの仲間に、自らを置くことになるであろう。

敵は、私たちを永遠の真理という高台に置き、この業を確立しその性格を与えてきた過去のメッセージにおける、私たちの信仰の柱に対する信徒の確信を根こそぎにするため、あらゆる手段を講じるであろう。イスラエルの主なる神は、その民を導き出し、天来の真理を彼らに開示してこられた。「力から力へ、恵みから恵みへ、栄光から

栄光へと進め」と語るその御声は、これまでも聞かれ、今なお聞かれている。この業は強められ、広がっている。イスラエルの主なる神がその民の守護であられるからである。

理論上、いわば指先で真理を掴んでいるにすぎず、その原則を魂の至聖所に携え入れることなく、むしろ肝要な真理を外庭にとどめ置いている者たちは、彼らを今日の彼らたらしめ、また彼らを世界において熱心にして決意堅固な宣教の働き人として確立してきた、この民の過去の歴史のうちに、神聖なものを何ひとつ見いださないであろう。

この時のための真理は尊い。しかし、岩なるキリスト・イエスに倒れて打ち碎かれることによって心が打ち碎かれていない者は、何が真理であるかを見、悟ることができない。彼らは自分の考えにかなうものを受け入れ、すでに据えられているものとは異なる別の土台を築きはじめる。そして、彼らは自らの虚栄心と自尊心をおだて上げ、われわれの信仰の柱を取り払い、自分たちの考案した柱に取り替えることができると思い込む。

これは、時の限りがあるまで続くであろう。聖書を深く学んできた者は誰でも、この地上の歴史の終幕の光景のただ中に生きている者たちの厳粛な立場を見て理解するであろう。彼らは自らの無力と弱さを痛感し、敬虔のかたちのみならず、神との生ける結びつきを持つことを第一の務めとするであろう。栄光の望みであるキリストが自らの内に形づくられるまで、彼らはあえて安んじて休むことはないであろう。自己は死に、高慢は魂から追放され、彼らはキリストの柔和と寛容を身に備えるであろう。ノートブック・リーフレット、60、61。